

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531052

研究課題名(和文) 校内授業研究における教師の職能発達を支援する校長のリーダーシップに関する研究

研究課題名(英文) Role of Principal's Leadership in Teachers' Professional Development through Schoolwide Lesson Study

研究代表者

北田 佳子 (KITADA, Yoshiko)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：60574415

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、校内授業研究における教師の職能発達を支援するために必要な校長のリーダーシップの役割を明らかにすることを目的としている。本研究では、縦断的かつ多角的な視点から調査研究を行い、つぎのことを明らかにした。すなわち、校内授業研究を学校経営の中核に据え、教師が学び合う専門家コミュニティとしての学校づくりを行っている学校長は、教職員の実態に応じて多様なリーダーシップ・アプローチを柔軟に組み合わせ、教師の職能発達を支援しているということである。本研究の知見は、学校経営学と教師教育学を架橋する学際的な視点を新たに提供する意義をもつものであると考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the role of principal's leadership in teachers' professional development through schoolwide lesson study. By conducting longitudinal research from multiple viewpoints, the study found out that the principal who recognized schoolwide lesson study as an inevitable activity in creating professional learning community in school took various leadership approaches according to the situation of schools as well as staffs. The result of this study offers interdisciplinary insights, bridging between the study of school management and that of teacher education.

研究分野：教師教育、授業研究

キーワード：学校経営 校長のリーダーシップ 校内研修 授業研究 教師の職能発達

1. 研究開始当初の背景

近年、各種答申等において、教師の職能発達を目的とする校内授業研究の重要性と、その推進にあたる校長のリーダーシップの必要性は、ますます強調されている。しかし、本研究の開始当初、校内授業研究における教師の職能発達を支援する校長のリーダーシップをテーマとした研究は管見の限りほとんど見られず、この分野の研究に着手することは急務の課題であった。

(1) 国内の動向

校内授業研究は、戦前から続く日本特有の研修形態である。しかし、その目的は、個々の授業の改善に焦点化される傾向が強く、校内授業研究を学校経営の中核に据え、教師が同僚と共に生涯学び続ける専門家コミュニティとしての学校をつくるという考え方は、これまであまり見られなかった。そのため、授業研究の分野では、校長のリーダーシップが中心的に取りあげられることは少なく、一方、学校経営学や校長のリーダーシップ研究の分野でも、校内授業研究が中心的なテーマとして扱われることはきわめて少なかった(北田、2011)。しかし、そのなかでも、加治佐(2005)や永岡(1985)は、教師の職能発達は学校経営の中核であるとし、それを支援する校長のリーダーシップの重要性を指摘していた。ただ残念ながらこれらの研究は、学校経営学の領域にとどまっており、校長のリーダーシップが、具体的に教師の職能発達にどう寄与しているのかという、教師の熟達化の視点を含む実証的な研究にまでは至っていなかった。

(2) 海外の動向

近年の世界的な動向として、教師の職能発達を保障する学校づくりの推進は、校長の重要な責務として位置付けられるようになってきている(OECD、2009)。元来、校長のリーダーシップ研究の蓄積が豊富な英米では、教師の職能成長を支援する校長のリーダーシップに関する研究もさまざまな形で展開しており、「教育的リーダーシップ」「変革的リーダーシップ」「支援的リーダーシップ」など、多様なアプローチの存在が明らかになっている(露口、2008)。しかし、英米では、教師の職能発達は個々で研鑽を積むことによって成し遂げられるという考え方が根強く、日本のように学校全体で取り組む校内授業研究のような形態を取ることはきわめて少ない。最近、日本の授業研究は「レッスン・スタディ」という名称で、海外のさまざまな国で実践されるようになってきているが(日本教育方法学会、2009)、その形態は、数学の授業研究なら数学教師だけで集まるといったように、教科別で行われているケースが圧倒的に多いため、授業研究によって学校全体を教師が学び合う専門家コミュニティに改革するという発想は少なく、ゆえに、そう

いった学校全体での授業研究を支援する校長の役割に関する研究の蓄積も乏しい。

2. 研究の目的

1で述べたような状況を踏まえ、本研究では、校内授業研究における教師の職能発達を支援するために必要な校長のリーダーシップを明らかにすることを目的と設定した。この目的を達成するために、本研究ではつぎに示す3つの視点を念頭に、研究を進めることとした。

(1) 校内授業研究における教師の職能発達を支援する校長のリーダーシップの具体的な様相の解明

教師の職能発達を支援するためには、どのようなリーダーシップ・アプローチが必要かという、その種類を明らかにするだけでなく、いかなる状況のときに、どういったリーダーシップがどのように機能すれば、学校を学び合う専門家コミュニティへと改革し教師の職能発達を支援することができるのかという、具体的な様相を解明することを目指す。

(2) 教師が学び合う学校文化の発展過程に関する縦断的調査

校内授業研究を通して教師が同僚と学び合い、互いの職能発達を促進し合う学校文化の形成にはある程度長い時間が必要となる。そのため、本研究では、調査対象の学校長や学校を、3年以上の複数年にわたり追跡調査することで、教師が学び合う学校文化の発展過程に関する縦断的調査を目指す。

(3) 学校経営学と教師教育学を架橋する学際的な視点の導入

1の(1)で述べたように、現在、校長のリーダーシップに関する研究は学校経営学の分野で、そして、授業研究における教師の職能発達に関する研究は教師教育学の分野で、それぞれ分離した形で行われる傾向が強い。しかし、実際の学校現場では、この2つの分野は分かちがたく結びついて機能しているものであることから、本研究では、学校経営学と教師教育学を架橋する学際的な視点を提供できる研究とすることを目指す。

3. 研究の方法

2に示した目的を達成するために、本研究では、つぎの3つの調査を柱として研究を進めることとした。各調査の具体的な方法を以下に示す。

(1) 校内授業研究に関する校長の意識調査(質問紙調査)

本研究の計画時には、全国学力・学習状況調査において、校内授業研究の実施回数が多い(上位5つ)・少ない(下位5つ)都道府県を調査対象にしようと考えていた。しかし、その後、東北地方太平洋沖地震が発生し、調

査対象として計画していたなかに、東北地方の県が複数含まれていたため、調査対象の変更を行った。最終的には、本研究代表者が校内授業研究の講師として関わっている学校の所在地である複数の自治体（静岡・富山・兵庫・茨城）の協力を得て、当該自治体の公立小中学校計410校を対象に質問紙調査を実施することとした。質問項目は、露口（2012）や国立教育政策研究所（2011）等を参考に設定した。

（2）校内授業研究における校長の役割に関する実態調査（フィールド調査、インタビュー調査、DVD記録分析）

校内授業研究を学校経営の中核に据えた先駆的な実践を推進してきたある学校長を調査対象とし、当該校長の勤務校であるB中学校においてフィールド調査ならびにインタビュー調査を行うことで、校内授業研究における校長の役割に関する実態を調査することとした。さらに、同校長が、以前に学校長として改革を行ってきたC、Dという2つの中学校における過去のフィールド調査記録や、校内授業研究のDVD記録も収集し、彼がこれまでに改革を行ってきた3つの学校において、どのようなリーダーシップ・アプローチに基づき校内授業研究の支援を行ってきたかを調査した。

また、本研究の計画時には予定していなかったのだが、国際比較の視点を取り入れるため、海外での調査も実施することとした。なぜなら、本研究代表者が初期の研究成果を国際会議等で発表し、他国の研究者と交流するなかで、つぎのような事実を知ったからである。それは、インドネシアや台湾にも、日本のB、C、D校と同様のヴィジョンで学校改革に挑戦している学校長が存在しているという事実であった。その学校長たちは、以前来日した際にB校やC校を視察し、その改革ヴィジョンに強く共感したため、自国でも同様の学校づくりを行おうと決心したのだという。国が違えば、環境や制度等さまざまな違いが出てくるので、もちろん単純な比較はできないが、校内授業研究を支援する校長のリーダーシップをより多角的に考察するために必要と判断し、インドネシアと台湾での調査も加えることとした。

（3）校内授業研究を支える学校文化の発展過程に関する調査（DVD記録の分析）

校内授業研究を積み重ねていくことにより、教師たちがともに学び合う学校文化を発展させていく過程を分析した先行研究（北田、2007；2009）を踏まえ、そうした学校文化の発展において校長がはたしている役割を明らかにするための調査を行うこととした。具体的には、B中学校における校内授業研究の記録DVD（当該校長が在職中の3年間分）を収集し、事後協議会における校長の発言の変化を分析し、教師たちが同僚とともに授業

の省察を通して学び合う学校文化の発展に、校長がどのような働きかけを行っているのかを分析した。

さらに、本研究では、同僚とのあいだに学び合う学校文化が形成されていくことによって、教師一人ひとりの力量がどのように変容していくのかということにも焦点を当て分析を行うとともに、その変容過程に校長の支援がどのような形で影響しているのかということについても考察を行うこととした。

4. 研究成果

（1）校内授業研究に関する校長の意識調査の結果

本研究代表者が校内授業研究の講師として関わっている複数の自治体（静岡・富山・兵庫・茨城）にある公立小中学校計410校を対象に質問紙調査を実施し、校内授業研究に関する校長の意識を調査した（回収数335校、回収率81.7%）。

その結果、校内授業研究の重要性を理解し、積極的に支援しようと努めている校長は多いものの、校内授業研究を学校経営の中核ととらえ、学校づくりのヴィジョンを教職員全員と共有するための重要な活動と考えている校長は少ないことが明らかとなった（小学校25.8%、中学校23.7%）。この結果から示唆されることは以下に集約される。第一に、小学校では、全校規模で校内授業研究を実施している割合は多いものの、その主たる目的は、授業改善や学力向上に置かれており、教師が学び合う専門家コミュニティとしての学校づくりの中核的活動として、校内授業研究をとらえている校長は少ないのではないかとことである。第二に、中学校では教科の壁が支障となり、全校規模で校内授業研究を実施する割合自体が少なく、学校づくりのヴィジョンを全職員で共有する重要な活動として校内授業研究をとらえることは難しい状況にあるということも示唆された。

しかし、調査対象自治体のなかで、静岡県A市だけは他の自治体と異なり、校内授業研究を学校経営の中核ととらえ、学校づくりのヴィジョンを教職員全員と共有するための重要な活動と考えている校長の割合が高いことが判明した（小学校37.0%、中学校68.7%）。とりわけ、静岡県A市内の中学校の割合はきわめて高い。これについて、当該市内の複数の中学校長に聞き取り調査を行ったところ、これは教育委員会等からのトップダウンの政策によるものではなく、各学校長が校内授業研究を中核に据えた学校経営を行ってきた結果、ボトムアップ的に生じた現象であることが示唆された。

（2）校内授業研究における校長の役割に関する実態調査の結果

静岡県A市において、校内授業研究を学校経営の中核に据えた先駆的な実践を推進してきたある学校長を調査対象と定め、彼がこ

れまでに改革を行ってきた3つの学校(公立B、C、D中学校)において、どのようなリーダーシップ・アプローチに基づき校内授業研究の支援を行ってきたかを調査した。具体的には、3校におけるフィールドワーク記録、ならびに校内授業研究会のDVD記録の分析・考察を行った(同校長は、本研究期間の開始とともにC校に異動したので、C校のデータは当該期間中の調査によるものである。A・B校のデータは、本研究代表者の過去のフィールドノートや、本研究のために学校側の協力を得て新たに収集したDVD記録に基づくものである)。

調査の結果、同校長は明確なビジョンを持ちながらも、トップダウンの改革を推進するのではなく、各学校の実態に応じて「教育的リーダーシップ」「変革的リーダーシップ」「支援的リーダーシップ」(露口、2008)を巧みに組み合わせ、教職員が同僚とともに学び合い成長してける専門家コミュニティづくりを実践していることを明らかにした。

校長のリーダーシップに関する先行研究を概観すると、1つの勤務校に限定した調査はいくつか存在するものの、本研究のように調査対象校長が歴任した複数の学校を追跡した研究はほとんど見あらず、その意味で、本研究の知見は重要な意味を持つものと考えられる。

さらに、本研究では、以下に示すような国際比較の視点を取り入れた調査も実施した。かつて同校長の勤務校には、定期的に海外から視察が訪れていたのだが、そのなかで、インドネシアならびに台湾から来ていた学校長たちが、この校長の学校づくりのビジョンに強く共感し、その後、自国に戻って現地学校の改革に着手したのだった。本研究では、そうしたインドネシアと台湾の学校を訪問し、視察に来ていた学校長たちが、それぞれどのようなリーダーシップ・アプローチに基づいて校内授業研究の支援を行っているかを調査した。その結果、それぞれの国の事情や教育制度が異なっているにもかかわらず、日本国内の調査で得られた知見、すなわち、校長が明確なビジョンを持ちながらも、各学校の実態に応じてリーダーシップ・アプローチを柔軟に変化させることがきわめて重要であることが明らかとなった。本知見は、海外での限られた数の調査校に基づくものであるため、今後さらなる調査を必要とする。しかし、これまで校内授業研究の支援に関する校長のリーダーシップ・アプローチ研究において、国内外の事例を比較検討する視点はほとんど見られず、その意味で、本知見は、今後の研究の展開に多くの示唆を与えるものと考えられる。

(3) 校内授業研究を支える学校文化の発展過程に関する調査の結果

B中学校における校内授業研究の記録DVD(当該校長が在職中の3年間分)を収集

し、事後協議会における校長の発言の変化を分析した結果、つぎのような特徴を発見することができた。改革当初は、教職員に対して指導や助言を与えることでリーダーシップをとろうとする校長の発言が多く見られたのに対し、改革が進むにつれ、校長の発言は徐々に少なくなり、校長の介入なしでも教職員がつながりながら協議を深めていけるように、間接的な支援を行うように変化していったことが明らかになった。そして、これらの調査結果を、ArgyrisとSchön(1974)の諸理論を基に分析・考察し、校内授業研究における教師の職能発達を支援する校長のリーダーシップを理論的に意味付ける試みを行った。

さらに、本研究では、同僚とのあいだに学び合う学校文化が醸成されることによって、教師一人ひとりの専門的力がどのように高まっていくのか、そして、その過程に校長の支援はどのような影響を及ぼしているのかについても探究を行った。とくに、近年、団塊世代の大量退職により、若手教師の育成が大きな課題になっていることから、B中学校で初任期の3年間を経験した若手教師に焦点をあて、彼女が校内授業研究を通していかに成長していくのかを分析した。その際、Shulmanら(2004)の「学習共同体モデル」を援用し、当該若手教師の「省察」「ビジョン」「動機」「理解」が、子どもたちの学ぶ姿の丁寧な観察と省察によって変容していく過程を明らかにするとともに、その変容にはたした校長の役割を明らかにした。

校内授業研究において、そもそも教師は何をどのように学び成長していくのか、というテーマを探究した研究自体が少なく、そのうえ、その成長過程に、学校長がどのような役割をはたしているかということ扱った研究はさらに少ない。したがって、本研究のように、校内授業研究における教師の職能発達を支援する校長のリーダーシップについて、長期的かつ多角的視座から探究した研究から得た知見は、今後の研究に寄与する重要な意味をもつものと考えられる。

<引用文献>

OECD(有本昌弘監訳)、スクールリーダーシップ：教職改革のための政策と実践、明石書店、2009

加治佐哲也、「学校経営者」の拡大と限定、日本教育経営学会紀要、第47号、2005、2-12

北田佳子、校内授業研究会における新任教師の学習過程：「認知的徒弟制」の概念を手がかりに、教育方法学研究、第33巻、2007、37-48

北田佳子、校内授業研究会における教師の専門的力の形成過程：同僚との協同的学習過程を分析するモデルの構築を目指して、日本教師教育学会年報、第18号、2009、96-106

北田佳子、現職研修の四半世紀：校内研修

の機能と校長の役割に着目して、日本学校教育学会編、21世紀型学校教育への提言：民主的学校と省察的教師、2011、141 - 155

国立教育政策研究所、教員の質の向上に関する調査研究報告書、2011

露口健司、学校組織のリーダーシップ、大学教育出版、2008

露口健司、学校組織の信頼、大学教育出版、2012

永岡順、教育改革における学校経営：革新の基本的課題、日本教育経営学会紀要、第27号、1985年、11-17

日本教育方法学会、日本の授業研究：Lesson Study in Japan、上・下巻、学文社、2009

Argyris, Chris. & Schön, Donald A., Theory in practice: Increasing professional Effectiveness, Jossey-Bass, 1974

Shulman, Lee S. & Shulman, Judith H., How and What Teachers Learn: A Shifting Perspective, Journal of Curriculum Studies, 36(2), 2004, 257-271

5 . 主な発表論文等

〔学会発表〕(計10件)

北田佳子、The Role of Vision in Creating Learning Community(招待講演)、The First International Conference for the School as Learning Community、2014年3月9日、学習院大学(東京都・豊島区)

北田佳子、授業研究で育まれる教師の専門性とは(招待講演)、日本教育方法学会第49回大会、2013年10月5日、埼玉大学(埼玉県・さいたま市)

北田佳子、校内授業研究会における教師の職能発達を支援する校長の役割、日本教育方法学会第48回大会、2012年10月7日、福井大学(福井県・福井市)

北田佳子、校内授業研究会における教師の専門的力量の形成を支援する校長のリーダーシップ、日本教師教育学会第22回研究大会、2012年9月9日、東洋大学(東京都・文京区)

北田佳子、Schoolwide Lesson Study Across Subject Areas: Creating School-based Professional Learning Communities (招待講演)、The 4th Conference on Lesson Study、2011年7月22日、インドネシア教育大学(バンドゥン・インドネシア)

〔図書〕(計4件)

千々布敏弥、北田佳子 他、教育開発研究所、結果が出る小・中 OJT 実践プラン 20 + 9、2015、印刷中

秋田喜代美、北田佳子 他、教育開発研究所、対話が生まれる教室 - 居場所感と夢中を保障する授業、2014、183 (138 - 143)

上野正道、北田佳子 他、北大路書房、東アジアの未来をひらく学校改革：展望と挑戦、2014、264 (27 - 55)

深澤広明、千々布敏弥、北田佳子 他、図書文化社、授業研究と校内研修：教師の成長と学校づくりのために、2014、160 (22 - 35)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

北田 佳子 (KITADA, Yoshiko)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：60574415